

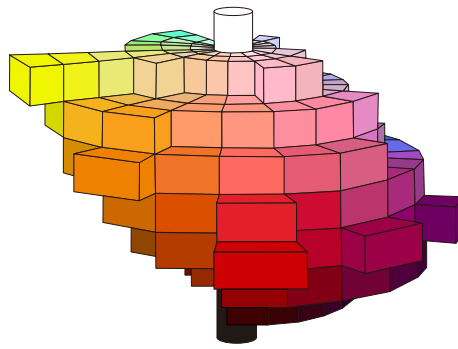
### ■はじめに

今回は、これまで紹介された研究室とは少し異なった「研究の風景」かも知れない。

生活環境学科の前身は被服学科で、当然衣服に興味のある学生がいる。3年ほど前にプロダクトの分野も扱うことにしたので、それに興味を持つ学生もいる。人の体に近い方から衣、プロダクト、建築と揃えた訳だが、興味は様々である。そして女子学生ばかりだから、建築系に興味があると言っても「建てる、築く」よりインテリアという学生が多い。まして、「色彩」などというすべての分野に関連するキーワードを並べていたりするものだから、研究室の中でも、建築では括りきれない活動を行うことになる。いや、ある学生などは、建築デザイン系のゼミとは異なることができることを売りにしてゼミ生を集めるべきだとアドバイスしてくれたことさえあるのである。

### ■色彩

女性は色彩に興味を持つことが多いらしく、女子大学の生活科学系の学科に『色彩学』が設定されていることは多い。しかし、ニュートン以来の伝統的な色彩学は、色が見えるメカニズムなど基礎データの蓄積は厚いが、カラーデザインとの直接的な結びつきを求める向きには欲求不満が残るとこ



マンセル色立体

ろがあったと思う。若干なりともそれを解消したいという思いで執筆したのが色彩学の講義で使用しているテキスト『カラーデザインのための色彩学』である。この本は、一昨年上梓したものであるが、その中に含まれるデータには、研究室の卒業生達が残してくれたものが多く含まれている。

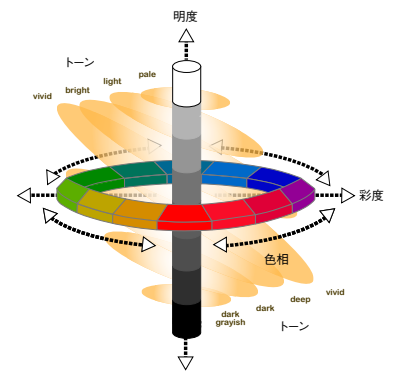
### ■配色調和

たとえば、配色調和に関連するデータがある。抽象的な図柄から衣服、プロダクト、インテリア、街並みまで、さまざまな対象にカラーシミュレーションを施し評定してもらおうと、美・好みといった感覚は類似した色、特に同系色相の組み合わせで評価が高くなることが多い。

いや、それでは看板やサインは困るのではないか。類似した色を用いて調和したデザインにすると色差が小さくなって読みづらくなってしまふのでは…。しかし、実験してみると、文字や細いラインを用いたデザインの場合には、配色の明度差が可読性と好みの両方に大きく関わっていることがわかった。つまり、高明度色と低明度色(白っぽい色と黒っぽい色)の組み合わせは読みやすく好まれそうだということになる。

### ■色彩評価の個人差

「蓼食う虫も好き好き」、「十人十色」。色の好みなど人それぞれであるから、研究し



色相・明度・彩度とトーン概念

ても無駄だ。そう言われることがある。確かにそういう部分はある。それでもめげずに評定実験を繰り返してみると、いくつかのパターンが見えてくる。それは意外と単純で、トーンの好みの違いといったものが抽出される。つまり、明るい色好き、薄い色好き、明暗に差のあるダイナミックな色好きといったものである。もっとも、女子学生が被験者であることが多いから、これらの結果も偏りがある。プロダクトの色の好みを男子学生と比較した時は、青系統と赤系統の色の好みに大きな違いが出た。色紙の場合の性差は小さいから、社会的な意味づけが加わったのだと思われる。

### ■感性のメカニズム

色紙を使って抽象的な配色の好みを調べると、巷に流布している色彩調和論の大半は無意味であることが確認できる。さらに、このプロダクトの事例のように、抽象的な色の好みと具象的な色の好みも異なる。

プロダクトのカラーシミュレーション画像を評定させた場合、クーラーや冷蔵庫や椅子などは共通して白やベージュが好まれるが、パンプスや財布、自転車などは赤だったり黒だったり、そういった色が好まれる個人差のあるグループが得られた。これは public な物品か private な物品かが好みと大きく関わっていることを示していると解釈できよう。先述した性差は private な物品で



見られたのだが、性別が個人の特性であることを考えれば当然の結果だと言える。個人的な色の好みとは異なる要因が実際の世界の色の好みを支配しているのである。

印象に及ぼす色の効果は、暖かさの感覚などは単純に色ごとの効果を面積の重みづけを考慮して加算すれば程よく予測できるけれども、美や好みのような感覚になると、ずいぶん複雑になる。それは上記のような意味的な情報が絡んでくるのが大きく関わっているのだろう。そのあたりを解きほぐして、人の印象評価の構造といったものを明らかにしていきたいと考えている。そういった人が下す判断についての知見が、よりよいデザインを生み出すヒントになることを期待しているのである。

### ■研究室の日常

最終的には「美」に迫りたいなどという大それた私の思惑を尻目に、学生たちはおおらかに過ごしているようである。

当学科では3年次にゼミに配属になる。週に1度、研究室の仲間と集まって文献を読んだり発表したりしながら、11月に執り行われる学園祭での発表の準備を進める。照明を制作して発表したり、クリスマス・イルミネーションを設置し、ろうそくによ

る照明を組み合わせたエキシビションを実施したり。昨年はメインゲートを制作したが、建築系の学生が本体を組み上げ、衣服系の学生が布地を調達して装飾した。また、アパレル系の研究室が行ったファッションショーの舞台照明や演出にも関わった。こういったコラボレーションが生まれるのは雑多な領域を内包していることの良さであろう。

そういった活動を通じて、興味を育てていってくれば、と考えている。

### ■研究の今後

今回は色彩に関する研究を中心に紹介してきたが、記憶色の研究（記憶した瞬間に色は変化している！）や、素材と色のマッチング（素材と密接な特徴を持つ木目のような物体でなくとも、色が印象に及ぼす効果は素材によって変化することがある！）などの研究には触れてこなかった。

もう一つの専門領域である環境心理学の分野でも、VDT作業をさせて疲れさせると街並みの印象が変化（疲れにくい人は都会的な街並み、疲れやすい人は自然が多かったり昔ながらの街並みを相対的に好む傾向がある！）とか、CGを使ってウォークスルー画像を作成し構成要素の影響を見

る（看板をまったく無くした場合評価が下がった！）といった街並みに関する研究、喫茶店の模型を用いて座りたい座席を調べたり（落ち着きのある隅の席が好まれた）とか、飲食店の画像を見せながら音楽を流し飲食店とマッチするBGMを探った（ジャンルの対応が主だが、それ以外も関係あるかも）というような室内に関する研究がある。このように、感性・印象といったキーワードを軸に、多様な研究を行って来ている。

今年度の研究課題には、街並みに1個の建物を挿入した時の印象の変化、照明光によって変化するインテリアの色彩と印象、色覚障害者の方の色の印象、プロダクト色彩の実測やインテリアを構成する色・素材の実測、風景の切り取りと美的判断の関連、子供にとっての環境のアフォーダンスに関する研究などが並んでいる。ここまでお金にならなそうテーマが並ぶ研究室も珍しかろうと思いつつ、学生時代くらい、お金に無縁なことをやってみようなどどけしかけるのであった。

（槇 究）

研究室のページ (<http://www.jissen.ac.jp/kankyo/lab-maki/index.html>) から、このページの元原稿カラー画像 (PDF file) にリンクしてあります。合わせてご覧いただくと幸いです。



左：研究室の風景、学園祭での制作物と準備風景、評定実験風景など  
左上：研究と関わりのある画像（街並みのCG、喫茶店模型、現実に近い画像の撮影条件を探る研究関連、家具模型配置実験、色記憶実験呈示素材）  
上：プロダクトのカラーシミュレーション画像（Adobe Photoshop 使用）